



社会的構築（コラム）

檜村，志郎

(Citation)

コミュニケーション能力の諸相：変移・共創・身体化:343-345

(Issue Date)

2013-03-08

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006620>



こらむ

社会的構築

檜村志郎

「社会的構築(または構成)」(“social construction”)とは、社会的構築(または構成)主義(“social constructionism”または“social constructivism”)という方針に基づく社会研究において、社会の人々が外界(心や他者を含む)について集合的に一定の共通理解を生産する過程やその生産物たる理解をいう。Calhoun(2002)では、社会的構築主義を「とくに社会的アイデンティティを含む社会的事実が社会的および歴史的状况に位置づけられた実践の産物であるとみなす社会学における広範な理論的志向」と定義している。社会的構築主義を標榜する諸研究は、自然科学的発見、社会問題、集団カテゴリー、歴史的事件、心などをめぐり、社会的構築過程やその生産物を研究する、緩やかな研究視角の集まりとして1980年代ごろから目立つようになった。

Social Constructionの語を英語において初めて用いたのは、Berger & Luckmann(1966)であるといわれる。それは、Alfred Schützの社会現象学にもとづく視角の体系化を試みたものであり、1960-70年代における日常世界の社会学(The Sociology of Everyday Life)の一部をなしていた。Berger & Luckmannの研究プログラムは、1980年代以降における社会的構築主義の理論的基礎の一部を提供している。

今日みられる社会的構築主義研究には、さらにいくつかの起源がある。

第1の起源は、1976年ごろから1980年代にかけて科学社会学において登場した科学的知識の社会学(Sociology of Scientific Knowledge)などとよばれる一群の研究である。それらは、実験室のエスノグラフィー等の手法により、科学者間のコミュニケーション、研究結果の文書化、その他の社会的相互行為を通じ科学的知識が関係者の間で共通に理解されていく過程に関心をよせた。それらはWittgensteinやJ. L. Austinらの哲学、Karl R. PopperやThomas S. Kuhnの科学哲学ないし科学史研究からも影響を受けている。

第2の起源は、Kitsuse & Spector(1977)にはじまる諸研究である。Kitsuse & Spectorは、社会問題を、客観的に存在するものとして研究者が定義する一定の問題的状态の研究としてでなく、社会の人々により「社会問題の定義が構築される過程」を通じて、研究すべきだとした。この種の研究は1980年代を通じて増加していった。社会問題の社会的構築主義には逸脱の社会学におけるラベリング理論

の影響が強い。

第3の起源は、Gergen (1982)である。実験心理学者であったGergenは、社会的行動には歴史的または文化的相対性と流動性があるため実験による仮説の検証という方法は有効でないとして、心に関する種々の知識が社会的構築物であるとの想定に立脚する新たな研究プログラムを提唱した。これに由来する研究や実践は、ナラティブ・セラピーその他の解釈学的志向をもつ活動として展開している。

このように社会的構築主義はさまざまな起源があり、その理論には多様性が見られるが、その主要な内容は、Berger & Luckmanを媒介として、エスノメソドロジー (Harold Garfinkel, Harvey Sacksら)、シンボリック・インタラクショニズム (Erving Goffman, Edwin Lemertら)の影響を受け、またそれらとともに現象学 (Schütz, Husserlら)に起源と基盤をたどりうるものが多い。

社会的構築主義をめぐる英米ではいくつか論争があった。たとえば、自然科学の対象とされる実在が社会的に構築されたものだという主張に対しては、それらの実在が自然的に実在しているものだという反論が試みられた。それに対して、何もかが社会的に構築されることと、自然的にそれが実在していることとは両立するなどの反論が行われた。それらについては、科学史学者・哲学者の Ian Hacking (1999)が詳しい。なお、Hackingの立場については、Michael Lynchがエスノメソドロジーの立場から論評を加えている (Lynch 2001: 240-254)。また、社会問題の社会的構築主義については、Woolgar と Pawluch が、エスノメソドロジーの立場から、何もかが社会的に構築されているという社会的構築主義者の主張がしばしばそのもの不存在という実在論的主張を恣意的に行っているのではないかと批判した (Woolgar & Pawluch 1985)。この批判に引き続く論争については、平・中河 (2006)が詳しい。

参考文献

- Berger, Peter L. & Thomas Luckmann (1966) *The Social Construction of Reality: A Treatise of Sociology of Knowledge* (『日常世界の構成』、山口節郎訳、1977)
- Calhoun, Craig (ed.) (2002) *Dictionary of the Social Sciences*
- Gergen, Kenneth J. (1982) *Toward Transformation in Social Knowledge* (『もう一つの社会心理学—社会行動学の転換に向けて—』杉万俊夫ほか訳、1998)
- Hacking, Ian (1999) *The Social Construction of What?* (『何が社会的に構成されるのか』出口康夫ほか訳、2006)
- Kitsuse, John I. & Malcolm B. Spector (1977) *Constructing Social Problems* (『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて—』村上直之ほか訳、1990)
- Lynch, Michael (2001) *The Contingencies of Social Construction*, *Economy and Society*, 30

(2): 240-254.

平英美、中河伸俊(2006)『新版・構築主義の社会学—実在論争をこえて—』世界思想社.

Woolgar, Steve & Dorothy Pawluch (1985) Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations. *Social Problems* 32: 214-227. = スティーヴ・ウールガー = ドロシー・ポーラッチ 「オントロジカル・ゲリマンダリング—社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美 = 中河伸俊 『新版・構築主義の社会学—実在論争をこえて—』(2006): 184-213.